いろは文字鋤（くさり）（その三十四―和洋ハイブリッド　沙翁（さをう）登場）

江尻成泰

いろはにほへと　ちりぬるを　　色は匂へど　散りぬるを
わかよたれそ　つねならむ　　我が世誰ぞ　常ならむ
うゐのおくやま　けふこえて　　有為の奥山　今日越えて
あさきゆめみし　ゑひもせす　　浅き夢見じ　酔ひもせず
（ん）

一　何時（いつ）の世のころ
ロメオこころは
花の館（やかた）に　匂（にほ）ふ妹（いも）なほ
炎の恋へ　…
（シェークスピア『ロメオとジュリエット』）

二　へいハムレット
問ふや行く道
ちぢ乱れあり　理にも惑（まど）ひぬ
抜身（ぬきみ）ぞ吠（ほ）ゆる　…
（シェークスピア『ハムレット』）

三

瑠璃の玉の緒　女に腕輪
和詩も添へむか　馨しき子よ
詠み交はす歌　玉の句となれ

四

烈士オセロそ　その勇馳せつ
強き心根　念ず妻の名
何ぞイアーゴら　乱企謀らむ

（シェークスピア『オセロ』）

五

空しや有情　現遊び居
居残る人の　後悔しおお
思ひは重く　暮るる時はや
やよ生くるまま　麿涙重け
世の中は　空しきものと　知る時し　いよよますます　悲しかりけり

（大伴旅人『万葉集』巻五―七九三）

六

景見て思ふ　古き海ここ
今宵波越え　永雲湧きて
照る入日ああ　天の大きさ
さぞ清明けき　清月待たゆ
渡津海の　豊旗雲に　入日さし　今夜の月夜　清明けくこそ

（中大兄『万葉集』巻一―十五）

七　夕さり眺め　愛づるや淡海
見聞き懐かし　志賀の鳥声
絵凌ぐ夕日　比叡の山も
百世偲ばせ　為む方知らず
淡海の海　夕波千鳥　汝が鳴けば　情もしのに　古思ほゆ

（柿本朝臣人麿『万葉集』巻三―二六六）

二〇二五年（令和七年）二月九日

註

副題＝ハイブリッド、近年ガソリンエンジンと電気モーター併用の車のことをよく言うが、単語としては「異種交配」、「雑種」。

沙翁＝昔はシェークスピア（1564-1616）に「沙吉比亜」、「沙士比阿」などと当てたそうだ。翁は男の老人（また老人を敬う語）。

一＝出足、最近話題になった「〇〇物語」の冒頭を借りたわけではない。互いに反目する名家の薄幸の恋人たちの悲劇。

二＝父である先王の死の状況を先王自身の亡霊から知らされたハムレットの復讐心と苦悩。問ふや行く道　ちぢ乱れあり＝例えば、かの有名な To be, or not to be: that is the question: 。この坪内逍遥訳は「世に在る、世に在らぬ、それが疑問ぢゃ」。抜身ぞ吠ゆる＝妃（母）の部屋で母を諫めているとき、カーテンが動いた。現国王（父の仇）

が隠れていると思ったハムレットは抜くが早いか一突きに・・・。が、その相手は・・・。

四＝ベニス軍の総督ムーア人オセロと愛する白人妻デズデモーナ。軍の中で自分を取り立ててくれないオセロを恨むイアーゴはデズデモーナの一枚のハンカチを種に奸計をめぐらす。

五＝世の中は・・・大宰府在任中、不幸、訃報が重なるなかで旅人が詠んだ（この歌の前年、妻の大伴郎女が没した）。

有情（うじゃう）＝感情を持っているいっさいの生物。山川草木に対して人間、鳥獣。衆生（しゅじょう）。

麿涙重（まろし）け＝麿は、われ、わたくし。涙が止まらない。

六＝渡津海（わたつみ）の・・・中大兄（後の天智天皇）の歌。「その二十三」でも取り上げた。斎藤茂吉が「万葉秀歌」で筆者を万葉集に引き入れた歌。

七＝淡海（あふみ）の海（うみ）・・・和洋の洋で御大沙翁なら、和では歌聖人麿に締めてもらおうと呼んだ。

もう何年も前、「その十二」ではこの歌を頭に描いて作った。

後　記

もう出来ぬ。いろは文字鋳断筆。

と言ってはいたが、またおかしなことをやった。気まぐれ以外の何物でもない。後記といっても述べることがない。

以前に採った万葉歌を素材にすることはあるが、全くの別作。「一度使った句はそのままでは二度と使わない」という筆者の決めたルールがある。

二〇二五年（令和七年）二月十一日